

近代吉田山の丘陵地開発における景観デザインに関する研究

The Landscape Design for Development on the Yoshidayama Hillside in Modern Era

出村嘉史*・川崎雅史**

Yoshifumi DEMURA*・Masashi KAWASAKI**

1 研究の背景と目的

日本を代表する景勝地が集積する京都において、とりわけ魅力のある空間の多くは、東山をはじめとした都市周縁の山麓部にある。そこには古くから多数の社寺仏閣を核として、京都のイメージを支える文化的な空間が形成されてきた。近代に都市化の波がこれらの都市周辺部へ押し寄せると、山辺の多くはその様相を一変させたが、幾つかの地域では、その渦中であって都市化と従来備えていた良好な環境の間で上手く折り合いをつけたデザインを適用している。これらの地域では、現在でも都市に住む人が自然と交流し、固有な文化的行動を促す場所であると考えられる。

京都吉田山は、近代の都市化の中で良好な環境を成立させた領域を備えている。ここは東山連峰の一つに数えられるが、京都市街地に孤立する小高い丘陵地である。元来吉田神社を始めとする宗教文化的な領域が丘全体に展開したが、近代に入って北東部が居住空間並びに数寄の空間として開発され、新たな丘陵地利用の形が創られた。これらの文化的領域の発展は、丘陵地形の景観条件（起伏に富んでいる事、自然が豊かである事、眺望が得られる事）を活かし、極めて特異な空間的構成を築き上げた事に起因していると考えられる。

そこで本研究は、近代以降に東向きに傾斜地に開発された二つの関係する領域（茂庵庭園と谷川住宅）を対象にして、景観条件に依拠して新たに造営されたランドスケープの創意工夫と、それが利用者のどのような経験へと帰着しているのかを明らかにすること、また、これら二つの領域の比較から、総体としてのデザインを明らかにすることを目的とする。特に、地形を利用し、あるいは操作して創られた敷地と、視点場の関係、そしてそこからの視界を中心に議論する。

吉田山（神楽岡）、あるいは東山一帯を扱った研究には、都市とのつながりを探ろうとするものや、建築様式を見出そうとするものなど、多岐に渡る蓄積が見られる¹⁾⁴⁾。

しかし、山辺における具体的な文化活動の諸施設とランドスケープの関係に言及した研究は稀少である。本研究は、実測に基づいて景観構成を図面化した点、また文化的諸空間をランドスケープとして捉えて解明しようとする点に新規性がある。

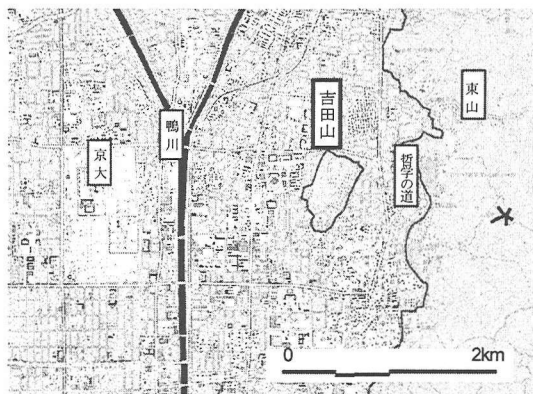


図1 吉田山周辺

2. 対象地：茂庵庭園と谷川住宅

(1) 吉田山の地形と沿革

吉田山は京都東山の一つに数えられるが、実際は孤立丘であり、周囲を比較的なだらかな傾斜の平地に囲まれ（図1）平安京へ向かって東山より一歩手前に独立して存在する。他の東山山辺と同様に、歴史とともにこの周辺には社寺集落や都市が形成されてきた。

この丘陵地は、特に都の鬼門に当たる事から平安初期に吉田神社が築かれ、さらに室町期に斎場所が設けられると、宗教的に強大な地位を獲得した⁵⁾。同時に名所地としても認識されるようになり、近世にははだいに庶民の屋外の遊び場となり、境内のみならず山全体を、人々が茸狩りなどの野遊びの場としていたことが、都名所図会や都林泉名勝図会などから判る（次頁図2⁶⁾）。

近代に市域が拡大すると、吉田山は市内へと含まれて、西麓の吉田村が文教地区として都市化の先駆けとなった。大正11年の都市計画地域指定がされると、吉田山以東でも住居開発が進んだが、同時期に運輸業で財をなし裏千家老分であった谷川茂次郎（茂庵）が、吉田山北東部を買い取り東山と向き合う斜面一帯に数寄の庭園を造営し、

Key Words：景観、空間設計、公園・緑地

* 学生員 京都大学大学院工学研究科 博士課程
(〒606-8501 京都市左京区吉田本町 Tel 075-753-5123

E-mail: n50461@sakura.kudpc.kyoto-u.ac.jp)

** 正員 博士(工) 京都大学大学院工学研究科 助教授

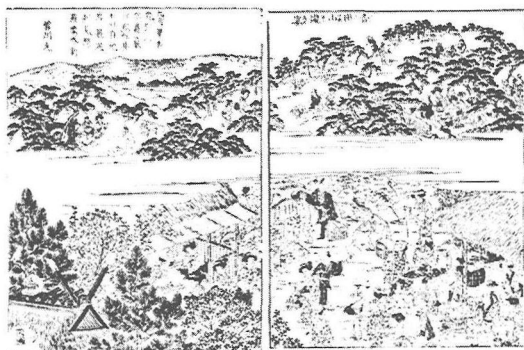


図2 吉田山遊宴 (都林泉名勝図会)



図3 吉田山周辺地図

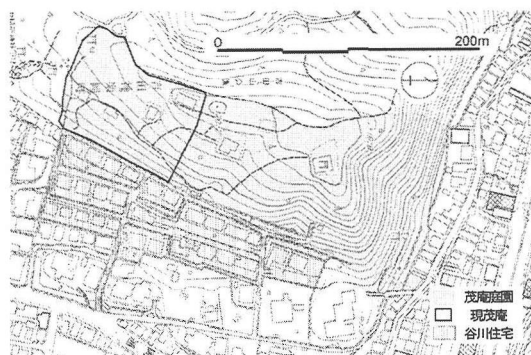


図4 吉田山北東斜面平面

続いて東伏見宮が南東側の土地に離宮（山荘）を造るなど、自然と一体になった空間造りが進められ、遊興の文化が培われた。

現在は都市の中に残された緑地として重要な存在となり、数寄の空間が一般に開かれ、茶会を始め、現代的芸術活動などをも見るようになった。

(2) 吉田山北東斜面

本研究で対象とするのは、図3に示す吉田山の北東部分で、かつて谷川茂庵によって開発された領域である。ここは丘陵尾根から中腹に展開する広大な茶庭と、中腹から麓にかけて広がる端整な住宅地の二つの領域から成る（図4）。

「吉田山山荘」と呼ばれ大正末から昭和初期の茶道月

報を賑わせた⁷茂庵の庭園は、吉田山北半面の尾根から東側の広大な敷地であった（以下「茂庵庭園」とする）。現在は図4に枠で示す部分のみが残されているが、その他は公園敷地へ転用された。しかし旧庭園内の苑路は公園内にそのまま残されており、当時の空間基盤を概ね知ることができる。すなわち、北部の傾斜地は50%前後の急傾斜であるが、大部分は東西に約75m、南北に約240mの矩形で東西の傾斜が20%ほどの広い斜面である。この斜面は大文字山の正面と1km程の距離で向き合う。造営当時、疎らな松林であったこの地は至る所に東山を望む視点場を備えていた。西側の都市の中心部に背を向けて、東山を望むこの位置は、市中の山居を求める茶の湯の空間として設えられた。

同じ時期、吉田山以东では現在の町並みの原型となる宅地開発が急速に進んだ。それに先駆けて谷川茂次郎は、図4にみるように、茂庵庭園から東に下る中腹斜面に借家群を造営した（以下、これを谷川住宅とする）。これらは概ね二階建ての木造銅板葺で家並みの整った家屋であり、敷地の石垣や石段にまで配慮の行き届いたデザインがされている。

庭園と住宅の二つの領域は互いに隣接するが、空間の用途及び構成の手法は互いに異なる。特に地形の作り方にその根本的な特徴が現れていると考え、次章からは、それぞれの領域について、傾斜地形に対して加えられた微地形操作を主眼に、それらによる景観的特性を分析する。

3. 茂庵庭園の地形操作と空間構成

先に述べたように、旧茂庵庭園の領域は、尾根筋から東中腹に大きく広がっていた。現在も庭園と公園部分に、石畳の苑路と建築あるいは建築の土台となった平場が残されており、苑路を中心とした庭園と建築の構成を敷地地形の中で分析できる。

(1) 自然地形を活かした全域の苑路構成

茶庭全域には、概ね自然地形が残されている。この大斜面を行き交う石畳の苑路は、図5（次頁）のように配されている。要所に茶室などの建築が乗る平場（図中の灰色部）が設けられている。

苑路の幅は概ね1m程で、そのテクスチャは傾斜と方向による一定のパターンに従っているが（次頁図6）、ルートそのものは地形との関わりから決定され、次のように設定されている。すなわち、庭園の上部と下部に2本の苑路が、概ね直線状で平坦、あるいは緩やかな傾斜で斜面に対して横向きに走り、その間を点在する茶室を結びながら円環する苑路で構成されている。これは、広い斜面上に単調に続く道を廃して、斜面上を上り下りして

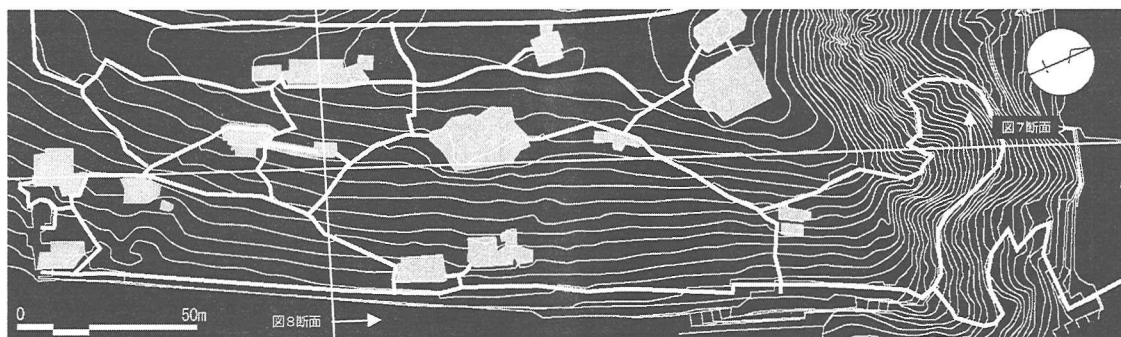


図5 茂庵庭園の地形（等高線 1m間隔）と苑路と平場の模式図（筆者作成）



←図6 茂庵庭園の苑路のテクスチャ

- ①は道の左右で高度が異なる場合（写真左が高）
- ②は道が等高線に対して垂直に近いとき
- ③は石段

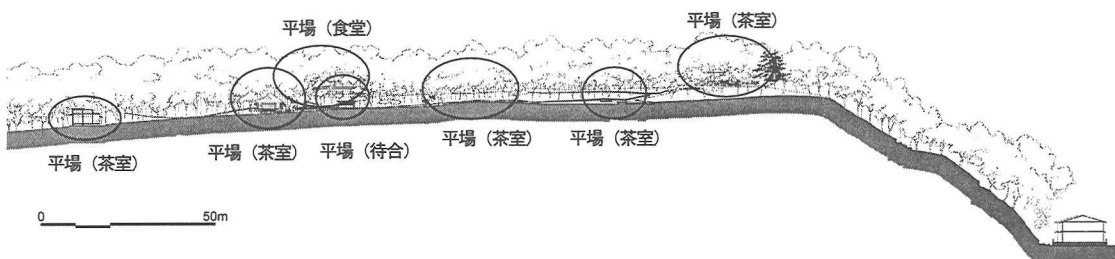


図7 茂庵庭園南北方向断面図（筆者作成、切口は図5）

散策する愉しみを得るための設計であることが見てとれる。ただし、庭園内の苑路の多くは等高線に対して斜めに走り断面勾配が緩くされている。また等高線に垂直に交わる道は短く、石段が設けられた。

このように、自然地形を残しつつ、茶庭の周遊を愉しみながら茶会を愉しむことができるように、道の勾配、スケールが設定されている。

（2）茶庭全域と茶室周辺の関係

実測により作成した縦と横に切る現在の断面を、図7、図8に示す。かつては苑路からも東山を望む眺望が得られた程疎らであった植生は、現在では全域を覆う森になっており、樹木の枝葉によって上部に出来る幕が地形に倣って傾くため、実際の景観体験としては、高さ4～6m程の空間が斜面にそって斜めに続き独特の圍繞感を持つ。この中を行き交う苑路の至る要素には、先に示した小さな平場が、主に壁面が石組みされた土台で作られており、その上に茶室や待合などの建築が配置された。

このように森に包まれた茂庵庭園は、そのいわば内部空間に要素となるデザイン密度の高い建築周りの庭園が詰め込まれている。現在では建築（平場）周辺のみが領域外へ向かう視線をもつ視点場となっている。

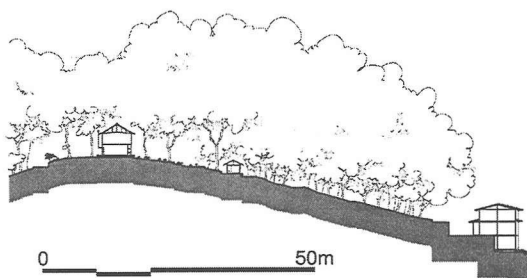


図8 茂庵庭園東西方向断面図（筆者作成、切口は図5）

（3）密に地形が操作される茶室周辺

茂庵庭園では、要素に配された平場を中心として、作り込まれた空間が特徴的である。現存する建築のうち、代表的景観として田舎席茶室を分析する。

作成した平面、断面図（次頁図9）に示されるように、茶室のみが独立した存在ではなく、その近傍における地形から空間づくりをはじめている。断面の詳細は図10（次頁）に示すが、傾斜に対して切り立つ土台に茶室が乗り、この土台の石垣を利用して下部空間が創られた。すなわち、斜面を切り込んで1m程の石垣を3段に分けて設え、それぞれのレベルにおいて、下から井戸端・待

合い・茶席の機能が備えられている。井戸端は下部の石垣に丸く囲われて造られ、その上の石垣は一部茶室へ接近するように窪められ、出来た空間に待合いと小径が配置された。三段目の石垣は、意匠的な調整である。これらの層の一・二段目に足をとり、最上部から付き出した舞台が待合いを覆うように設けられた。

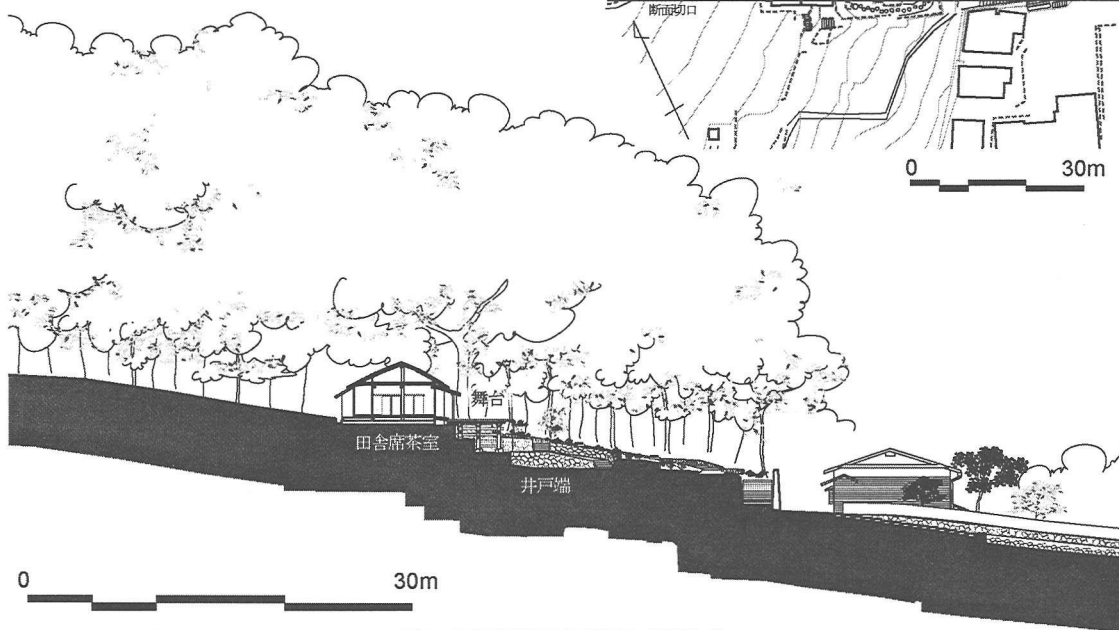
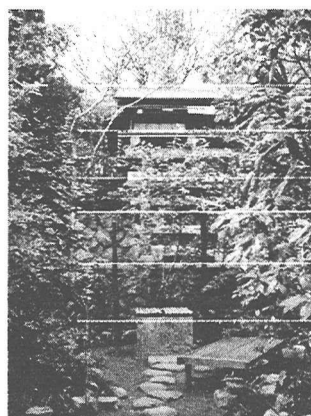


図9 田舎席周辺の平面断面図（筆者作成）



- 田舎席茶室（茶席）
- 張り出した舞台
- 茶室が乗る石垣
- 二段目石垣
（手前が経路と待合）
- 一段目石垣
- 最下層（井戸端）

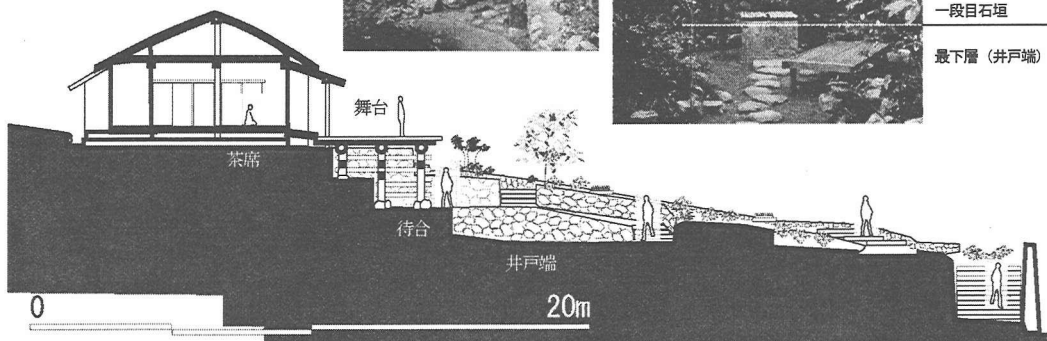


図10 田舎席茶室周辺に造成された地形の詳細と空間の立体的構成（筆者作成）

このように田舎席茶室の前面（下部）空間の、3次元的に重ね合わさり、凝縮された多様な機能は、基本的に全てこの石垣の構成によって生み出されているといえる。それらをつなぐ一連の道程は、茶席周辺において刻々と移り変わる豊かなストーリー性を持つに至っている。

そして茶室東側の障子戸を開け放つと、茶席内から舞台に誘導される視線が東山、大文字へ導かれる（図10の左上写真）。この演出は、舞台と、その先25mの敷地内にある植栽の高さをコントロールすることによって二重の見切り線が設けられ、借景としての大文字を切り取ることで成立している。

同様に周辺の地形を操作して、斜面から張り出し東向きの眺望を志向するデザインの茶室が、茂庵庭園に多く造られた。現存する三つの茶室は、どれもこの構成に依っている。

茶道では、通常茶室は内向きの世界であり、座敷に至っては積極的に眺望を求めることはしない。しかし茂庵庭園では、こういった慣習に囚われない谷川茂庵の創意工夫によって、進んで眺望を求め、この場所そのものの臨場感を愉しむことを最優先したものと考えられる。

4. 谷川住宅の地形操作と空間デザイン

谷川住宅の構成は、谷を挟んで1km先に向き合う大文字山、西上に隣接する茂庵庭園を意識したものである事は容易に推測される。ただ居住地としての生活風景の中に、如何にこれらを取り込み構成するのが要点であり、このための創意工夫がこの領域全体に見られる。

（1）段地上に構成された9つのブロック

図11は谷川住宅上部の敷地平面図である。実際現地を歩くと複雑な構成で成り立っている印象を受けるが、実際には、9つのブロックを南から3つ、3つ、2つ、1つと、単純に並べた構成になっている。

図12の断面図は、実測により谷川住宅敷地を東西に切ったものである。このように、住居と路地の組み合わせが段地の上に乗る構成である。段上では、一部例外を除いて、歩行者のための路地よりも建築が手前（東側）に配置された。

その結果、図13のように各建築の二階部分に大きく東側へ開いた窓から、下段の家の屋根の上に視線を通して必ず大文字を独占出来るようになっている。

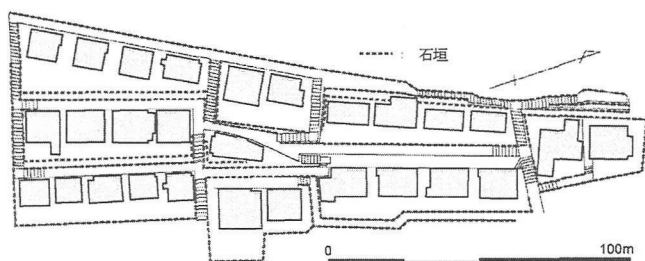


図11 谷川住宅上部の敷地構成図（筆者作成）



図13 前に並ぶ屋根越しに望む眺望

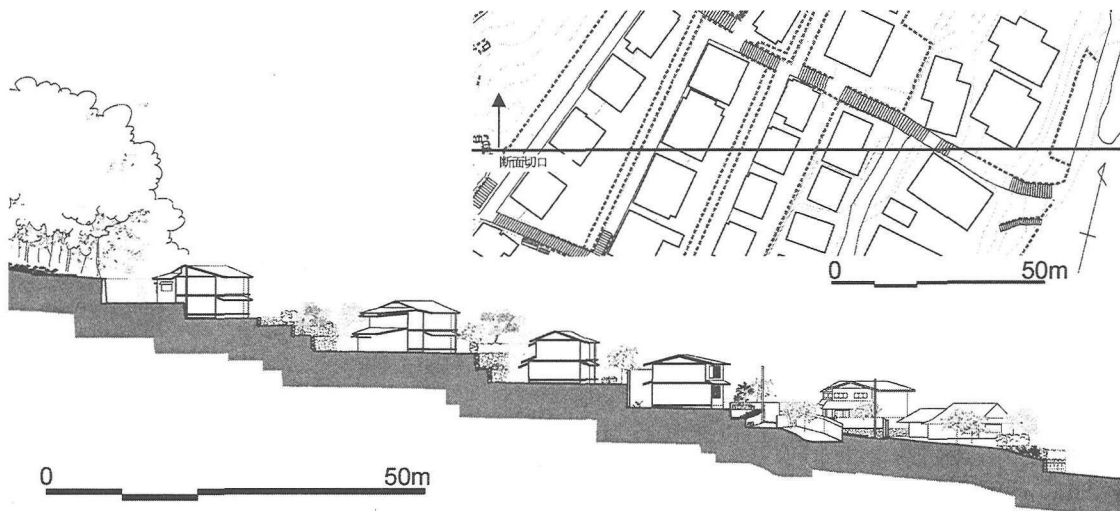


図12 谷川住宅平面断面図（筆者作成）

路地は崖（石垣）と建築に囲まれた落ち着いた空間になっている。東西 20%程の傾斜地を段式にするため出来る各 3m 以上あるギャップによる圧迫感は、図 14 のように、石垣を数段に分け、隙間に刈り込んだ植栽を施すことによって解消することが図られている。これは圧迫感の解決のみならず、同時に住居前に小さな庭のような穏やかな風景を獲得し、住環境の向上へとつながっている。

先に見た単純な平面構成の中で、地形に沿わせるため、規則的なブロックの並びに、ずらす調整を加えた部分が存在するが（図 15 のマークした部分）、ここは上記の地形の基本構造が無効化し重ね合わさる場所になっている。この部分が、石段、石垣、通路の屈曲の組み合わせによって、丁寧に処理されている事により、この領域を歩く人にとっては、不規則に石垣とその上の庭と建築が立ち現れ、思わぬ通路や石段に出会い、景観が急速に移り変わる、大きな視覚的効果を生み出されることになる。

このような人工地形の造りによって生まれた一つ一つの景観が重ね合わさり、次に挙げるような幾つもの特徴的な景観を創出することに成功していると考えられる。

（2）丘陵地形に収まる建築の景観

谷川住宅は、桮の神楽岡通から長く続く石段を登った中腹にある。整然と並ぶ家並みの全貌を捉えることは、前面の建築や植栽で遮られて不可能であるが、石段沿いに屋根を重ねる家々の姿を垣間見せる（図 16）。谷川住宅の敷地へ至ると、背景には茂庵庭園の森が迫り、その森と調和を見せる戸別に手入れされた庭の植栽に囲まれて木造銅板葺屋根の建築が並ぶ。

先に述べたように、整然と並ぶ区画構成の中の小さなずれが効果的であり、上る石段がまっすぐ森まで続かず、上段の建築とその土台の石垣で突き当たることで、景観に変化が生まれている。また、先に述べたように建築は、どれも東向きの眺望を意識して建てられているため、下から見上げると概ね正面向きに揃っている。そして、建築の東側手前には庭が造られている。これは家屋の中からみる眺望に近景を足しあわせる景色の工夫であるのと同時に、またこのように見上げた時に、背景の森と調和する意図も読みとることができる（図 17）。

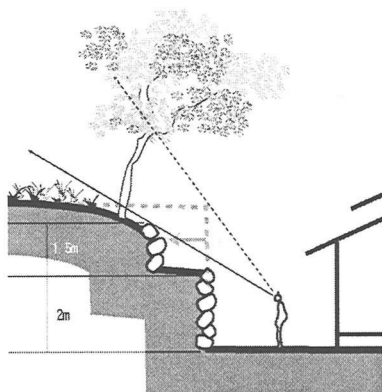


図 14 段差のある石垣の効果模式図
(左) とその景観 (右)

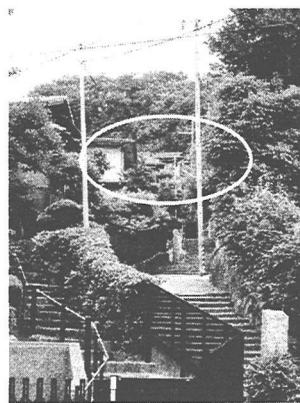
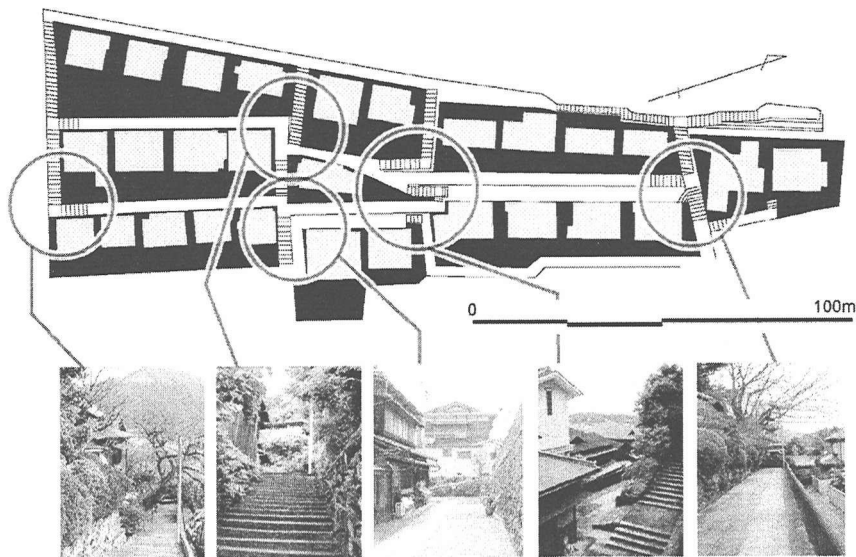


図 16 神楽岡通から見上げた谷川住宅



■ : ブロック

図 15 ブロックの不整形配列部
における多様な景観処理



図17 手前の石垣・庭、背後の森に挟まれた谷川住宅

(3) 石段からの眺望

段地の構成と家屋の並びに所以して、谷川住宅の領域において、代表的な視対象であるといえる大文字への眺望が動的に移り変わる、連続する視点場は、銅板葺屋根と焦げ茶の板壁が特徴的な建築をなめて大文字へ視線を投げかける石段上である。

図18は石段から東向きに得られる景観である。地形が大きく下り、そして街を挟んで大きくせり上がって大文字に至るため、これが通路の示す先に明確な対象物として演出される。この対象物へ視線が届く間に近景を構成する町並みが、実際の景観演出を左右していると考えられるので、この特徴を明確にする必要がある。

そこで、先の景観と図19に示す谷川住宅以外の景観とを比較する。後者は、東山をより広い視野で捉えて谷間の街も見渡す景観であるが、この比較は優劣を示すよりも、谷川住宅の景観における近景の構成を明らかにするものである。すなわち、谷川住宅は車によるアクセスを考慮に入れていないために比較的幅の狭い通路を形成している事、そのため住宅の壁面や植栽が迫り、また石段の通路は区画の結節点毎に屈曲しているため、降りる先が半ば隠されている事、さらにこの両者はほぼ同じ傾斜の元地形をもつものであるが(勾配約15%)石段で構成した谷川住宅の通路部分は部分毎により大きな勾配を多様に(25%~45%)作り出している事があげられる。

5. 二つの領域

(1) 両者比較による相違点と共通点

以上、茂庵庭園と谷川住宅について、地形に対する取り組みを主眼に、景観上の効果を議論した。ここで両者を比較する事により、それぞれの特徴を明らかにしたい。

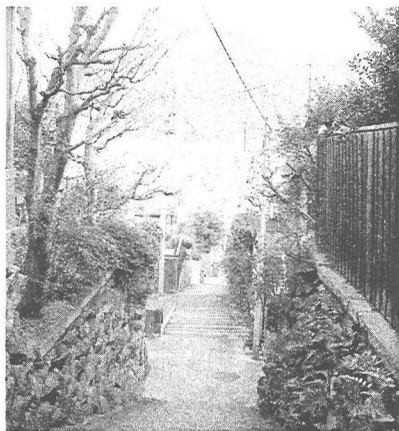


図18 谷川住宅石段からの眺望



図19 周辺宅地からの眺望(図18と比較)

地形の活用の仕方について比較すれば、茂庵庭園においては自然地形を根本として構成されていたのに対して、谷川住宅は区画を造成するための人工的な段地形を根本としていた。茂庵庭園における傾斜の操作は、茶室周辺では土地の造成を伴い積極的に行われていたが、全域に関しては、ルートを選択によって体感する傾斜を調節するものであった。対する谷川住宅の傾斜(主に石段部分)は、平場と石段の踏面によって調節され、自由に操作され、これによる視覚的效果が大きかった。

先に見たように、谷川住宅には、地形としての石垣のみならず、建築の壁面が空間の大きな要素になっており、これらの壁面の構成が、眺望を始めとした景観の見えに大きく影響していると言えるが、茂庵庭園においては、概ね地盤の影響によって景観が決定されている。こうした中で、視点場のつくられ方も、茂庵庭園では地盤の構成によって作られ、谷川住宅では区画と壁面の関係から構成されている。

共通点は、二つの領域の経路の意匠に多く見いだすことができる。概ね共通して石畳とセメント、そして石垣によって構成されており、そのデザイン、技術において共通、あるいは連続するデザインが用いられている(次頁図20)。そして、どちらも最も頻繁に用いられる眺望の視対象を「大文字」として、眺望性の高いデザインをしている。こういった共通点が、二つの領域の間に景観

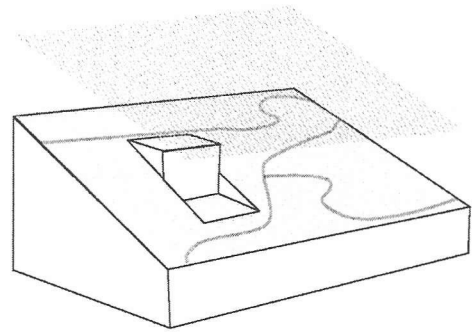
的な連続性を創出している。

以上をまとめると、図 21 のようなモデルで表すことができる。

(2) 茂庵庭園と谷川住宅の都市環境的位置づけ

こうした比較から明らかにされる各領域の特徴を、これらの位置の関係として考察する (図 22)。

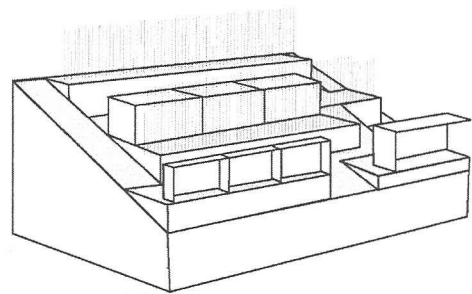
茂庵庭園の領域から谷川住宅を見れば、整然とした屋根の連なりが都市的印象を与え、茂庵庭園の視点場を相対的に山中に感じさせる。谷川住宅の領域から茂庵庭園を眺めると、上空の樹木によって覆われた姿は、谷川住宅に迫る森として映る。このように谷川住宅と茂庵庭園の間に設けられた 3 m 程度の擁壁により、二つの領域は、断絶よりもむしろ接続の関係を持つ。



茂庵庭園
自然地形 (傾斜地) のまま
急傾斜を避けるルート選択された回遊式苑路
斜面上の位置、茶室周辺は造られた地形が景観を決定
→地形優位



図 20 2領域にわたる道の意匠・素材の共通性、連続性



谷川住宅
人工地形 (段地形) に改変
ブロックの合間を縫う路地と石段
壁面 (石垣、建築) の組み合わせが景観を決定
→壁面優位

図 21 茂庵庭園と谷川住宅の基本構成比較

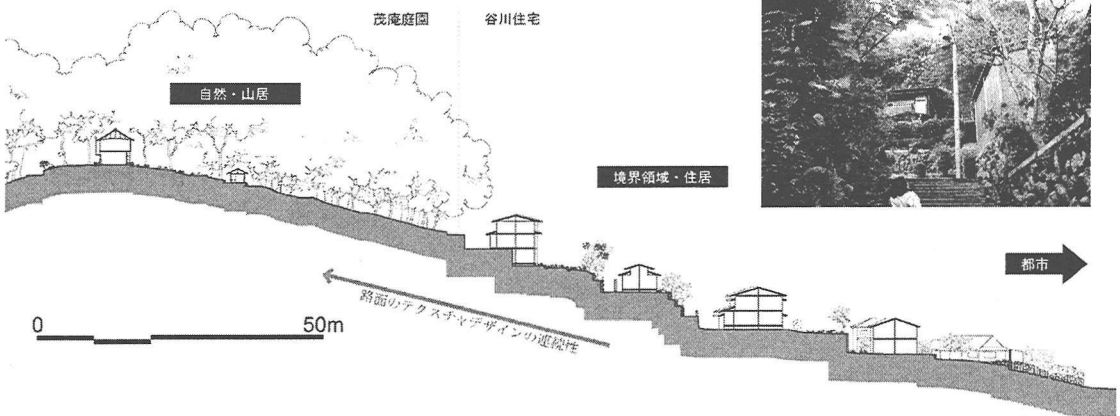
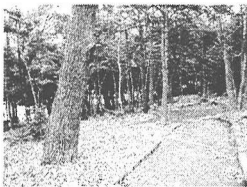


図 22 吉田山北東部斜面における自然・都市系の立場

以上の接続性は、一見使用目的の異なる茂庵庭園と谷川住宅を、決して別個のものとして開発したわけではない事を示している。つまり、谷川茂庵の開発においては、自らの庭園と、借家のための住居群を、都市から自然へ移行する一つの文脈の中で同時にデザインした事が分かる。それぞれの関係性により浮かび上がる特徴は次のようにまとめられる。

- 茂庵庭園は、吉田山の稜線から東側の中腹までを占める領域であり、その大部分は自然地形に任せている領域であった。そして、その中に眺望を取り入れた近代的茶室が部分的に設けられた。これが都市の中では最も山深い山居として位置付けられ、日常から離れた山の演出となる。
- 谷川住宅は、人工的に造成された都市的な立場ではあるが、深山の茂庵庭園と同じ自然素材とパターンのデザインが多用され、また各敷地内の庭園からあふれた植栽により、自然の表現が立面として現れ、都市と山の中間的演出がされている。

6. 結語

以上より、吉田山北東部斜面開発における地形操作を元にした空間デザインの創意工夫が明らかになった。

二つの領域における地形の傾斜は同程度であるが、その活用の仕方が異なっていた。地形が卓越する茂庵庭園と、作られた立面が卓越する谷川住宅の対比が明らかになり、また二つの領域に連続性を与えるのは、共通する意匠のデザインと、共通する視対象、すなわち谷を挟んで先に望む「大文字」であったことが明らかになった。伝統を踏まえた茶室の空間にさえ、このグランドデザインとも言える大景観への志向があり、地形的好条件を活かして視点場を設け、それぞれの秩序で近景を整えることで実現されていることが明らかとなった。

これら二つの領域の関係は、吉田山に自然から都市的景観へ至る階層を為していた。大正末期の都市計画に則り、吉田山以東に初めて住宅開発が始まったが、先陣を

切って為されたこれらの領域の開発が、吉田山の自然から都市へ連続する一つの秩序を形成した事は意義深い。

この秩序の中でこそ、最も自然的な領域に自由闊達な数寄の文化を根付かせ、さらに中腹に続けて演出的な自然を持つ居住領域には文人の文化を育ませた（京都大学教官のための借家とした事実がある）、谷川茂庵の計画意図は十分に繁榮されたといえるのではないだろうか。このようにして形作られた、自然へ人為を程よく馴染ませた構成は、その後ここを利用する人々に、文化的意識を持たせるに至り、諸活動の舞台として活用されるようになった。

謝辞

本研究には多くの方々のご協力を頂きました。東京工業大学名誉教授中村良夫先生には貴重なご指導を賜りました。京都市建設局の小林義樹様には貴重な資料・ご示唆を賜り、谷川次郎様、福村祖牛様、昭和堂の松井久美子様をはじめ、茂庵、神楽岡町住民の皆様にはヒアリング、実測調査において多大なご協力をして頂きました。京都大学地球工学科の首藤恵子さんには実測その他の甚大な作業を手伝って頂きました。ここに感謝の意を表します。

¹⁾ 中川等：近代京都における住宅の発展に関する考察，京都大学工学部建築学科卒業論文，1980.3

²⁾ 矢ヶ崎善太郎：近代京都の東山地域における別邸群の初期形成事情，日本建築学会計画系論文集 第507号，pp.213-219，1998.5

³⁾ 中嶋節子：近代京都における市街地近郊山地の「公園」としての位置付けとその整備，日本建築学会計画系論文集 第496号，pp.247-254，1997.6

⁴⁾ 山田圭次郎：多層認識モデルによる敷地の研究，土木計画学研究・講演集 No.23(2)，pp.605-608，2000.11

⁵⁾ 京都市編：京都の歴史 第7巻，p.342-344，1979.10

⁶⁾ 秋里籬嶋：都林泉名勝図会、小川多左衛門、1799

⁷⁾ 今日庵：茶道月報大正15年8月号～昭和3年12月号、1926-1928

本研究では、主に現地の観察と実測をもとに、近代の都市拡大期に誕生した吉田山北東部の数寄空間と住宅を組み合わせた領域の地形操作による空間構成と景観演出上の工夫を明らかにした。数寄空間である茂庵庭園では、丘陵地の傾斜をそのまま活かして広く沿路を張り巡らし、重要な視点場となる建築周辺の地形のみを立体的に造形し効果的に演出された。東下に隣接する谷川住宅群では、傾斜を段地にして住居を配置し、石垣と建築に挟まれ閉じた通路空間と、積極的に眺望を捉える石段で構成された。両者の改変した地形の上で建築と庭、通路の位置関係により景観が決定され、山居と住居のデザインに連続性を作り、自然から都市へ至る秩序が形成された。

The Landscape Design for Development on the Yoshidayama Hillside in Modern Era

By Yoshifumi DEMURA, Masashi KAWASAKI

This paper aims to reveal the design for a development on the northeast part of 'Yoshidayama' by a man of prosperity in the modern era. The upper area was set as a wide garden for tea-ceremonies, using the hill's terrain. Exceptionally around the tea-houses plenty of view-points were created by manipulating terrains to enjoy the transition of scenery. The lower area was set as a high-quality residential zone, formed on stair-like platforms. It is identified that these areas create a proper order when people approach toward nature, by manipulation of terrains and composition of architecture, gardens, and paths.
